



三田ふるさと学習館

三田の古代 新着展示物

歴ネットさんだ考古部会



新しい資料が入りました！

今回は「三田の弥生時代」として、代表的な3ヶ所の遺跡から出土した土器・石器などを中心に展示しました。展示されている遺物は、全て本物です。

来館して実際の色や質感を、ご自分で感じていただけましたら幸いです。

弥生時代

- 弥生時代は日本に稲作が伝わり、稲作による共同作業を通し、ムラのまとまりや指導者（有力者）が出現してくる時代と考えられています。
- 考古学者は使われた土器の変化によって、前期・中期・後期の3段階に分けています。
- 近畿地方では、弥生時代をⅠ様式からⅤ様式の5段階に分け、前期（Ⅰ様式）、中期（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ様式）、後期（Ⅴ様式）に区分しており、また弥生時代中期は、中期前半（Ⅱ様式）中期中頃（Ⅲ様式）中期後半（Ⅳ様式）に分けられています。
- 『三田市史』では弥生時代を紀元前300年頃から紀元後200年頃までの500年間として書かれていますが、実年代については、国立歴史民俗博物館を中心に年代観の再検討が進んでいます。

三田の弥生遺跡

- 三田盆地の弥生時代遺跡は、丘陵裾に広がる扇状地に広く分布しています。
- なかでも早く集落が営まれたのは、武庫川右岸に位置する対中遺跡や武庫川左岸に位置する三輪餅田遺跡、三輪宮ノ越遺跡などで、前期の終わり頃から中期の初め頃にムラが営まれています。
- 中期後半になると、それまでのムラを離れ、新たなムラが営まれます。
- 特に、武庫川右岸の天神遺跡や奈カリ与遺跡、中西山遺跡、平方遺跡、有鼻遺跡など、台地や丘陵上に大きなムラが出現します。

石包丁を作ったムラ

- 稲の収穫時の必需品が石包丁（穂摘み具）ですが、石材は地域によって異なります。
- 中央構造線の走る近畿地方南部では「結晶片岩」、北部では「粘板岩」、瀬戸内海沿岸ではサヌカイト（安山岩）製の比率が高くなっています。
- 三田盆地では凝灰岩と頁岩、あるいは泥岩が互層となった「塩田石」が用いられています。
- 「塩田石」製石包丁が作られた遺跡としては、材料がとれる塩田遺跡のほか三輪餅田遺跡、天神遺跡、福島長町遺跡が知られています。
- 一方、奈カリ与遺跡や有鼻遺跡などでは未製品の石包丁が出土せず、石包丁を供給したムラと完成品を手にしたムラがあるのではないかと考えられています。

天神遺跡

弥生時代中期～後期

- 武庫川西岸丘陵部が三田盆地に突き出た位置で、天神台地と呼ばれる北西端に立地しています。
- 環濠により防御された低地性あるいは台地性の集落であり、高地性集落とは異なっています。
- 出土土器は弥生時代中期中葉以降のものが中心で、大半がIV様式です。
- 居住者が集落・墓を営み、盛んに活動していたのは、中期後葉という限られた期間であったと判断されます。
- 遺跡は中期末をもって断絶したと考えられ、中期以降環濠で防御された台地上に、居住する必要がなくなった可能性が高いと思われます。
- 中期後葉における石包丁製作や系魚川産ヒスイ製勾玉、四国系・丹波系土器の存在は、西摂津地域を中心に東播磨地域やその他の地域と広く交流が行われていたことを示しています。
- 方形周溝墓は5基検出されていますが、数10基は存在した可能性が高いと推定されています。
- 石鏃には、形態から縄文時代に属する可能性のあるものもあります。
- 石包丁は溝・斜面から非常に多く出土しており、大半が「塩田石」で、未製品も多いことから、石包丁を製作していたことがわかっています。

方形周溝墓から出土した 広口壺型土器

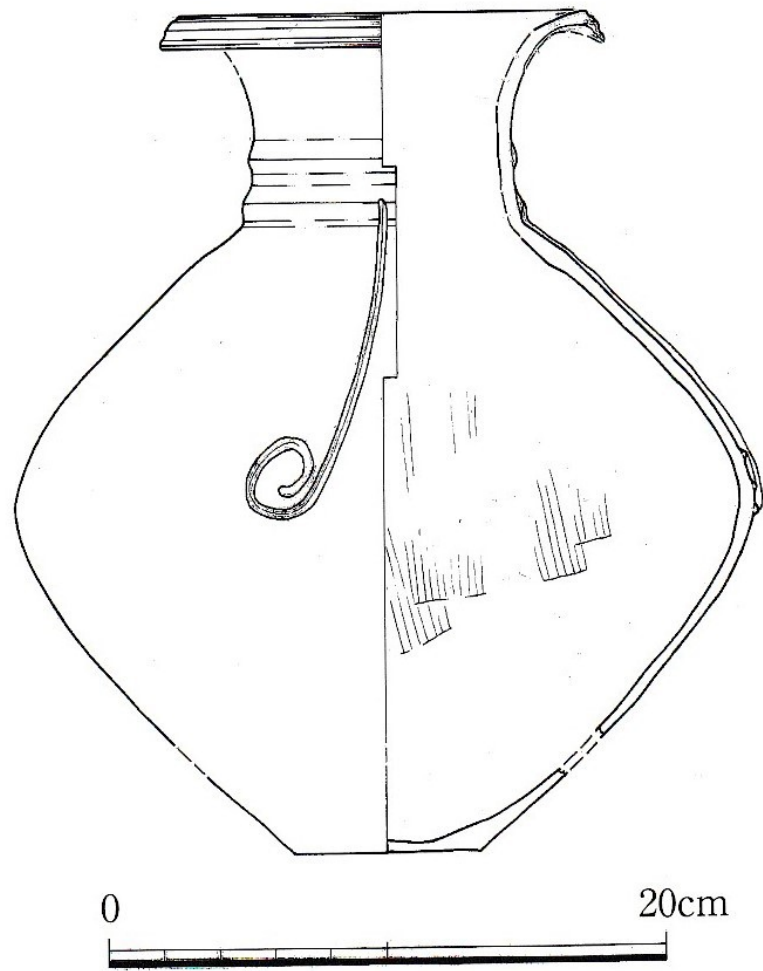


図13 方形周溝墓出土の土器

広口壺型土器

- そろばん玉のように中央がひろがる胴体に、口がラッパ状に開いて縁が少し垂れた広口壺形土器です。
- 首の部分には、2本以上の粘土紐を巻き付けた凸帯がみられます。
- この土器の大きな特徴は、胴体の上半分にJ字形に近い粘土紐を前後左右の四方に1本ずつ貼り付けていることです。
- 粘土紐を縦に貼り付ける装飾は、播磨地域や旧畿内地域の西部にみられますが、この壺形土器のような例は、現在のところ発見されていません。
- このような装飾は、祈りや祓いなどの祀りごとにちなむ紋様、あるいは記号と考えられており、この土器の紋様もそうした特別なデザインである可能性があります。

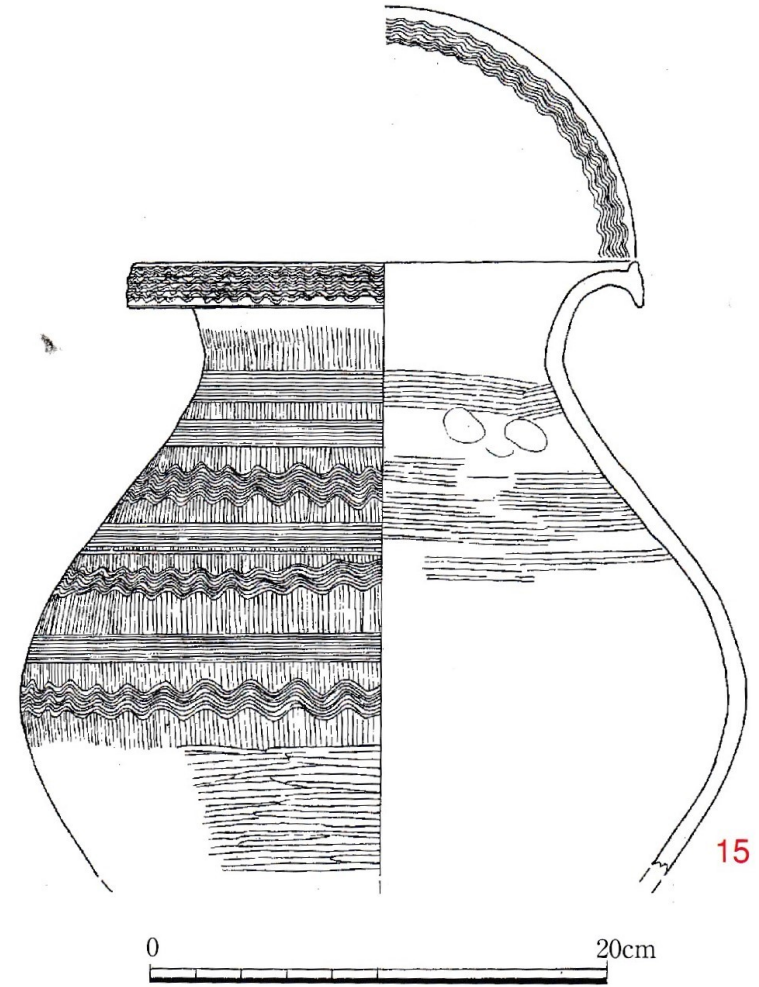
環濠から出土した 壺型土器



壺型土器

- 環濠からは広口の壺形土器が多数出土しています。
- これらの中には旧国摂津地域で多数見つかる形のものや、受け口状のものなどがあります。
- これらの土器では、表面に残された製作時の痕跡や整形の工具跡、紋様を観察することができます。
- 紋様には櫛描きの直線紋、波状紋、扇形紋などがあり、他に頸部に粘土紐を巻きつけ断面を三角形にしたもの、なでてゆるやかにしたもの、指や工具で刻むものなどがあります。
- 弥生時代の土器や地域文化の多様性を考える上で、欠くことのできない資料です。

環濠から出土した 広口壺



広口壺

- 環濠からは広口の壺形土器が多く出土していますが、旧国摂津地域で多く見つかるものや、受け口状になる壺形土器などがあり、これもその一つと思われます。
- 胴体部分の最大部は、真ん中よりやや下に位置しており、口の部分の直径は21.6cm、高さは26.4cm、胴部最大径は31.4cmあります。
- 口の縁は、ななめ上方へ立ち上がる太い頸部より上のはして曲がり、水平近くひらいています。
- 端の部分は上下方向に広がり、外端面は幅が広がっています。
- 口縁端面には波状文と凹線文が重ねて施されています。

石鏃 (せきぞく)



縄文時代？



縄文時代？



縄文時代？



ヒスイ製勾玉と磨製石鏃



翡翠製勾玉

磨製石器・石鏃

石包丁と石剣

弥生時代の石包丁 (穂摘具)
天神遺跡 (天神三丁目) 約 2000 年前

製作途中の石包丁

石包丁の原石 (採集品)

鉄剣形磨製石剣

天神遺跡出土の石包丁

復元品

出土した石包丁 (刃の部分が平らに作られています。)



三輪餅田遺跡

(弥生時代前期末～後期)

- 三田盆地南東部の武庫川北東岸にある丘陵部の、小支谷が形成した扇状地の末端近く、JR三田駅の北側に位置しています。
- 三輪小学校改築に伴い3次にわたる全面調査が実施され、弥生時代中期の土坑が120基以上検出され、大半が中期前葉ごろと思われます。
- 弥生時代中期で6mの円形竪穴住居跡2棟が重複して検出されていますが、1棟は焼失住居（一部が三田市消防本部の玄関で展示）で、もう1棟は2回の建て替えが行われています。
- 石包丁とその未製品が30数点以上出土しており、石材はすべてが「塩田石」で、石包丁製作遺跡と考えられます。
- 出土土器は弥生時代中期前葉のⅡ様式に比定されるものが大部分を占めることから、ここは短い期間に限って営まれた遺跡であったと考えられます。

土器片



櫛描文とへら描沈線文

- 三輪餅田遺跡から出土した土器には、へら描沈線文と櫛描文が共存しています。
- へらによって1本ずつ紋様を描く沈線文は前期の土器で、中期になるとクシ状の道具により複数の線（櫛描文）を描くようになります。
- 三輪餅田遺跡の土器には両者の文様があり、弥生前期から櫛描文へ移行する段階のものと思われます。
- 同じ櫛描文でも天神遺跡のものと比較すると三輪餅田遺跡の櫛描文が稚拙で、年代の古さを感じます。
- 甕の口縁部を多条の沈線文や櫛描文で飾るのは、瀬戸内地域に影響を受けた土器ということができます。

石鏃



石包丁 (未製品)



石包丁（未製品）



福島・長町遺跡

縄文時代・弥生時代中期後半

- 武庫川と大池川との合流点の南側に位置し、JR新三田駅の北西、東からのびる微高地末端部分の水田面に遺跡は広がっています。
- 弥生時代中期の竪穴住居跡3棟をはじめ、溝・土坑・焼土坑が多数発見されています。
- 住居跡の一つは最大径8～9mの円形住居跡と推定され、数回の建て増しが行われ、焼失住居と判断できます。
- 当遺跡では多数の石器が出土しており、一部は縄文時の石器も含まれ、縄文時代から人の活動が行われていたと推定できます。
- 石包丁はいずれも「塩田石」製のもので、製品と未製品が出土しており、石包丁の製作が行われていたと思われます。

石鏃 (せきぞく)



これより上は縄文時代のものと考えられます

石錘 (せきすい)



石錘 (せきすい)



いかがだったでしょうか？

興味がわきましたら、ぜひ「三田
ふるさと学習館」におこしくださ
い。これ以外にも、多数の遺物
を展示しております。